

# 『十六夜日記』の地名詠―「路次の記」を中心に―

深見聡  
坂井伸子

## 一、はじめに

『十六夜日記』は、弘安二年十月、阿仏尼が訴訟のために京都から鎌倉に下向した旅とその後を記録した作品である。『十六夜日記』の前半部分は、鎌倉下向の旅を語る「路次の記」であり、後半は、鎌倉滞在の様子を伝える「東の記」である。また、九条家本以外の諸本には、最後に長歌が付されている。<sup>(注1)</sup>「路次の記」は、出立の理由を述べる序にあたる記述と、多くの和歌を含む旅の記から構成される。

従来、『十六夜日記』の和歌については、注目されてきた。その理由として、著者である阿仏尼は藤原為家の晩年の正妻であり、また、息子為相は歌道冷泉家の祖であることから、歌道家としての立場が重要視されてきた背景がある。

『十六夜日記』の和歌についての先行研究の主なものを概

観すると以下のようなになる。

風巻景次郎氏は、「路次の記」の和歌において、和歌を詠んだ場所が、地名のみをあげた場所の二倍以上にのぼっていることから、歌を重要視していると分析したうえで、

地名のみの土地の大部分が古来歌に詠まれることの殆ど無かった地名であるのに反し、歌の詠まれた地名は殆どすべて歌によって知られた土地である事を思うと、阿仏尼は、歌学に於て歌枕として尊重されたる土地を実地に見聞し、其の土地に関する和歌を詠出するという事に深い関心を有して居た事が推測されるのである。<sup>(注2)</sup>

と指摘している。また、「路次の記」の全歌数五十五首のうち、四十九首は和歌によって知られた土地を詠み込むか、其処で詠んだことが明記されている和歌であると指摘し、

性質からその土地に関した名所歌が大部分である。(中

略)阿仏尼の唯一の目的は名所の歌のよき見本を作ると  
いう事に存したのである。

と結論づけている。<sup>(注3)</sup>

また、川嶋郁子氏は、風巻氏の論を受け、『十六夜日記』に  
出てくる和歌一つ一つの修辞技巧を詳しく分析し、阿仏尼の  
他作品に出てくる和歌の修辞技巧と比較することで、『十六夜  
日記』の和歌は、

紀行文として情景や気持ちを表現しようとするより、掛  
詞を多く用いて、掛詞の例を示そうとする目的をもって  
詠んだものであるといえよう。

と言及している。<sup>(注4)</sup>

一方で、高橋ほつ枝氏は、『とはすがたり』と『十六夜日記』  
の鎌倉への道中の記録を比較し、『十六夜日記』の和歌につい  
て

その和歌は、修辞法や故事にみち、内容は鎌倉へ訴訟に  
行くという目的遂行についてであることが多い。さもな  
くば、古典を想起し、典型的表現で終わっていることが  
多い。従って一見簡潔で整っているかに見える作品が読  
者にとっては興味を引かず、おおむね生氣に欠けている。  
つまり、和歌の型にとられすぎで、観念的にことをは

こんでしまったため、このような結果になったと思われ  
る。

と結論づけ、『十六夜日記』の和歌は類型的表現が多いと指摘  
している。<sup>(注5)</sup>

さらに、長崎健氏は、先行作品に記述される地名を一覧し  
『十六夜日記』に登場する地名と比較した上で、

この路次の章段は、つらい旅が続けている、ある個人の、  
母親としての感傷の記録として読まれるべきであろう。

と考察しているが、根拠となる用例は、歌枕とされる「鳴海  
湯」「小夜の中山」「宇津の山」の記述が挙げられ、他作品に  
比べ『十六夜日記』は、歌枕の景物的部分が不足しているこ  
とを指摘するにとどまっております、その他の地名詠については、  
触れられていない。

以上のように『十六夜日記』の和歌について分析される際、  
名所歌枕詠はこれまで頻繁に取り上げられてきた。その一方  
で、少数ではありながらも和歌の世界で馴染みの薄い地名を  
詠み込んだ和歌について総合的に分析している先行研究は、  
管見の限り見当たらない。

そこで本稿では、後に述べるとおり、当時必ずしも歌枕と  
されてはいなかったと考えられる地名を詠み込んだ和歌を中

心に分析をおこないたい。『十六夜日記』に書かれた地名の中から、和歌に詠み込まれた地名を抽出し、他出の検討を踏まえ、阿仏尼がどのように和歌を詠んでいるのかその特色について検証する。その際、「東の記」では、和歌に詠み込まれた地名が六個、九条家本以外の諸本にある長歌には地名が十六個しか出て来ないため、特に地名が頻出する「路次の記」に限定して分析を進めていく。

なお、『十六夜日記』の本文は、九条家旧蔵本・松平文庫本を底本とする岩佐美代子校註・訳「十六夜日記」（新編日本古典文学全集48『中世日記紀行集』）に拠る。また、本稿における和歌の引用は、『新編国歌大観』に依拠し、表記の一部を私に改め、引用文中の傍線は私に附した。

## 二、阿仏尼の地名詠に見える表現技巧

『十六夜日記』は、風巻氏の先行研究<sup>(注7)</sup>で指摘されるように、「名所の歌のよき見本」という要素がある。その理由として、歌枕を詠んでいる和歌が大半を占めていることが挙げられる。具体的な例として『十六夜日記』における逢坂の場面では、

一二さだめなきいのちはしらぬ旅なれど又あふ坂と  
たのめてぞ行く

「さだめなき」は仏教の老少不定をやわらげた表現であり、「又あふ」は無事戻りたいという願望と「逢坂」という地名の掛詞である。「逢坂」を詠んだ作は、先行の類例が多い。例えば、

かつこえてわかれもゆくかあふさは人だのめなる名  
にこそありけれ (古今和歌集・三九〇・紀貫之)  
これやこのゆくも帰るも別れつつしるもしらぬもあふ

さかの関 (後撰集・一〇八九・蟬丸)

等がある。いずれも逢坂の関での感懐を詠んだ和歌として知られ、「逢坂」には「逢う」という意味が込められていることが一般的に指摘されている。<sup>(注8)</sup>このことから、阿仏尼詠は、歌枕としての伝統を踏まえた和歌となっていることがわかる。同様に、『十六夜日記』の不破の関の場面では、以下のように和歌が詠まれている。

一八ひまおほき不破の関屋はこのほどの時雨も月も

いかにもるらん

「もる」は、「守る」と「洩る」の掛詞であり、関の縁語となる。本歌は、

人すまぬふはのせきやのいたびさしあれにしのはた  
だ秋のかぜ (秋篠月清集・一一二八・藤原良経)  
とされる。「不破の関」は美濃国を代表する名所として多くの

和歌に詠まれている。中でも「人住まぬ」の和歌は、阿仏尼詠でも共通する点が多い。これまでの先行研究で指摘される『十六夜日記』の和歌は、これらの例からもわかるように、「名所の歌のよき見本」として、多くの先行歌が見られる著名な歌枕を詠んだものが多い。

では、『十六夜日記』の和歌すべてにおいて歌枕のみが重要視されていたかという点、対照的に歌枕として確立していなかったと考えられる地名を詠み込んだ和歌も存在する。それらの和歌は、先行歌も少ない。

まずは、管見の限りながら先行歌があることが確認できなかった和歌を概観する。

一九たび人は蓑打ちはらふ夕ぐれの雨にやどかる笠縫（註10）の里

『古今和歌六帖』や、『五代集歌枕』に「かさぬいのしま」としての用例はある。これらは古くから歌人の参考書となつたと見られていることから、「かさぬい」という言葉は素材としては当時よく知られていた可能性は高い。しかし、用例としては少ないため、歌にはあまり詠まれていなかった可能性が考えられる。先行歌における「かさぬいのしま」は摂津の入り江に浮かぶ島を詠んでいる。（註10）阿仏尼の場合は、美濃国の「笠縫」であり、場所が異なっている。『十六夜日記』におけ

る笠縫の和歌は、雨具である笠を縫うことと地名の笠縫を掛けて、東海道上の地名を強調している。その一方で、本文には、

関よりかきくらしつる雨、時雨にすぎて降りくらしせば、道もいと悪しくて、心よりほかに笠縫の駅といふ所にとどまる。

とあり、辺り一面が真つ暗な様子や、雨はやむことなく降り続き、道がとても悪く、不本意にも笠縫に宿泊することとなったとあり、和歌とは対照的に旅の厳しさ辛さが描かれている。

二三一の宮名さへなつかしふたつなくみつなき法（註11）をまもるなるべし

『阿仏尼全集』所収の四條局假名諷誦には、世を遁れ、真の道を尋ねて、二もなく三もなき一乘法華の行者、毎日に誦誦を積むこと二千七百余部、病の床、臨終の際まで念佛怠ることなし。

（註11）とあり、為家の仏道について述べている。

「一の宮」の和歌の「ふたつなくみつなき法（註11）」からは、四條局假名諷誦の「二もなく三もなき一乘法華の行者」という言葉が連想されることから、阿仏尼が為家の教えに傾倒していただけでなく、その思いを和歌に積極的に詠み込もうとす

る姿勢がみられる。尾張の「一の宮」の先行歌は管見の限り見られないことから、当時詠まれることが少なかったと考えられる。当時必ずしも歌枕として定着していないと考えられる地名であっても、阿仏尼は詠み込んで、和歌に仕上げていく。

四二たれか来て見つけのさとと聞くからにいとど旅寝の空おそろしき

「みつけ」は地名の「見附」と「見つける」が、掛詞になっている。「たれかきて」と話しかける様子、見附の里と「聞くからに」と、伝聞的な表現を入れることで、旅先での人々との関わりやその様子が伝わってくる。「空おそろし」からは、都にはない雰囲気と同時に都から離れた「見附」という場所の恐ろしさや旅先の危険な様子が伝わってくる。本文には、今夜は遠江、見附の国府といふ所にとどまる。里荒れて物恐ろし。

とある。恐ろしい思いをしながらも勝訴を目指し、必死で旅を続けている阿仏尼の心境が看取される。この和歌について、安井重雄氏が、

都における観念的な歌枕詠とは明らかに異なる、旅の途上の地方における実地性を帯びている。

と指摘しているとおり、当時の歌枕詠とは一線を画した表現

であることがわかる。

五六心からおりたつたこの蛭衣ほさぬうらみと人にか

たるな

「おりたつ」は掛詞になっており、「蛭衣」とは縁語である。「うらみ」は「浦見」と「恨み」の掛詞となっている。本文には、

今日は、日いとうららかにて、田子の浦に打ち出づ。海人どもの漁するを見ても、

とある。「うららか」という言葉が使われているのは、この場面のみである。注釈書では「のどか」という意味に解されており、おだやかな様子として評価していると見られる。『十六夜日記』は、旅の大変さをうかがわせる表現が多い中、この「うららか」という言葉は特徴的な形容表現と思われる。また、海人の漁をする姿を見て、和歌を詠んでいることから、風景だけでなく、その場所に暮らす人々を想起させる地名詠であることにより、田子の浦という歌枕をより鮮明に生き生きと印象づけることができる。「田子の蛭衣」での先行歌の用例は管見の限り見あたらない。しかし、「田子の海人」や「田子」と「海人」の用例は多くみられ、「田子の浦」という歌枕は、歌論書や辞書にも歌枕として記載がある。さらに、「田子」と「蛭衣」の組み合わせは見られない。田子という地名を尊

重しつつも、蟹衣という言葉を組み合わせている点に阿仏尼の特異性が見られるのではない。海人衣は、海人が着る衣服で常に海水に濡れていることから、涙にぬれている衣を比喩している。<sup>(注14)</sup> 自身のつらい身の上を表現すると同時に「恨みを語るな」と自分を戒めており、道中での阿仏尼の心中を推し量ることができる。「田子」の先行歌としては、

袖ぬるるこひぢとかつは知りながら下り立つ田子のみ

づからぞうき (源氏物語・一一五・六条御息所)

という、六条御息所の複雑な心境を表す和歌がある。二つの和歌は「おりたつたご」が共通している。阿仏尼が先行歌を踏まえ、和歌の表現技巧を様々に駆使し和歌を詠んでいることが見て取れる。その一方で、実際に東海道の旅のその場で見た景色や人々の様子とともに自身の心情を表現しようとする阿仏尼の姿勢が理解される。

六二あづまぢのゆさかをこえて見わたせばしほ木なが  
るるはや河の水

この和歌には、「あづまぢ」「ゆさか」「はや河」という三つの地名表現が見られるが、この三つの地名のうち、「あづまぢ」や「はや河」は先行歌が多い。例えば、以下が挙げられる。

あづまぢのさやの中山なかなかにしか人を思ひそ  
めけむ (古今和歌集・五九四・紀友則)

みごもりにいきづきあまりはやかはのせにはたつとも  
ひとにいはいめやも (万葉集・一三八八)

しかし、「ゆさか」は先行歌が管見の限り見られない。当時の東海道の様子については、新城常三氏『鎌倉時代の交通』<sup>(注15)</sup>に、

東海道は、京都・鎌倉という二大政権所在地を結合する街道として優先するに至り、その重要性はとみに高まった。

との記述がある。<sup>(注15)</sup> さらに『日本地名大辞典』にも、

古来竹之下から矢倉沢(南足柄市)を経て関本(南足柄市)に至る約八kmの道筋を足柄坂と呼んだ。(中略)平安期の歌人たちも少なからぬ詠歌を残している。しかし、鎌倉期に入ると京都と鎌倉との間の交通が頻繁となったため、新たに三島から小田原へ通じる箱根越え八里(三二km)の新道が開発され、源頼朝が箱根権現社を崇敬したこともあって、足柄峠はしだいに衰退した。

と指摘されている。<sup>(注16)</sup>

『十六夜日記』にも、本文に

足柄の山は道遠しとて、箱根路にかかるなりけり

という記述があり、平安期の東海道は、足柄山を通る足柄路が主流であったが、鎌倉幕府が成立し、箱根路がその主流と

なっている。足柄山は通過していないが、和歌には詠まれているため、平安期に歌枕として定着していた「足柄山」を意識していることがうかがえる。しかし、それだけではなく湯坂を通る「箱根路」でも和歌を詠んでいる。加えて本文には、いと険しき山を下る。人の足もとどまりがたし。湯坂とぞいふなる。辛うじて越え果てたれば、麓に早川といふ川あり。

と記述されている。箱根路を積極的に記述しようとした阿仏尼の視点が見られる。先行の文献や歌枕だけでなく、東海道の現状も『十六夜日記』では描こうとしている点も注目される。

### 三、先行歌との比較から見える阿仏尼の地名詠の特色と文 化圏からの影響

次に、『十六夜日記』の和歌において歌枕として定着していないと考えられる地名を詠んだ和歌の中で、先行歌が少ないものについて分析したい。それらの和歌を分析していくと、元来言われてきた為家との強固な影響関係、さらにはその文  
化圏からの影響も見受けられる。<sup>(注17)</sup>

まずは、為家との影響関係がわかる和歌を見ていきたい。

一五たび人はみなもろ共に朝立ちてこま打ちわたすや

すの川霧<sup>(注18)</sup>

「野洲川」は、大嘗会の風俗歌に詠まれることが多い。<sup>(注19)</sup>『十六夜日記』以前に「やすの川霧」を詠みこんでいる先行歌は次の一首となる。

朝ぼらけやなせのなみの音にしてわたりやいづこやすの  
川霧<sup>(注20)</sup> (為家集・一三六二・藤原為家)

「朝」「やすの川霧」が共通するモチーフであるが、それだけでなく、阿仏尼が「こまうちわたす」と表現しているようにこの場面では、「音」が重要な表現となっている。為家も同じように「音」を使う点が共通している。

四五わたらんと思ひやかけし東路にありとばかりはき

く河の水

「菊川」は、尋ねる意味の「聞く」と地名の「菊川」が掛詞となっている。同じように、「菊川」の「きく」を掛詞にしている和歌は「うつりゆく」の和歌のみとなる。他の和歌は、「菊川」の地名を示している。承久の乱(一一二二)で藤原宗行が辞世の詩を作った場所として知られることとなった場所でもある。先行歌は以下のものが挙げられる。

うつりゆくわがかげのみやかはるらんおいせぬものと  
きくかはの水 (明日香井和歌集・一五二六・藤原雅経)

菊川につゆのなさけをとどめ置きてはかなき名をもな

がしけるかな (信生法師集・一一・信生法師)

昔南陽県菊水

汲下流而延齡

今東海道菊河

於西岸而失命

(古今著聞集・二六六・中御門中納言宗行卿)

わすれめや軒のかやまに雨ふりて袖ほしかねし菊川の

宿 (中書王御詠・二三四・宗尊親王)

露ながらぬれてほすなる旅衣さよの山路の菊川の水

(都路の別れ・二〇・飛鳥井雅有)

神な月又うつろはぬ菊川に里をわかれず秋ぞのこれる

(為家集・一三五八・藤原為家)

先行歌はいずれも中世期の作のものである。宗行卿以外の人物は、いずれも阿仏尼と直接かかわりがあるとされる人物である。阿仏尼自身も「ありとばかりは」と詠み、菊川での出来事は知っていたと考えられる。菊川の前出の地名は、歌枕として定着している「小夜の中山」、さらに菊川をはさんで、次の地名は「大井川」「宇津の山」と著名な歌枕が続く。その中で菊川は当時としては新しいエピソードを持つ地名となる。予想もなかった数奇な運命に思いをはせている阿仏尼の様

子が看取される。

五五さえわびぬ雪よりおろす富士河の川風こぼる冬の

衣手

「富士」は、「富士のね」や「富士のけぶり」など、多くの用例が見られるが、「富士河」の場合の先行歌は次の四首が挙げられる。

あはむとはおもひわたれどふじかはのすまはずはつひにか

げもみえじを (左兵衛佐定文歌合・二〇・躬恒)

峰はもえふもとはにござるふじ河の我も憂世を住みぞわづ

らふ (深養父集・六四・清原深養父)

音にききし名高き山のわたりとて底さへふかし富士川

の水 (海道記・四六)

吹きおろす雪かとみれば白妙にまさごぞなびくふじの

河風 (為家集・一三六〇・藤原為家)

為家の和歌は、「おろす」「雪」「富士」「川風」と、阿仏尼の和歌と共通する素材が多く見受けられる。前項の一三五八番歌と、一三六〇番歌については、建長五年に詠まれたものである。<sup>(註20)</sup> 建長五年は、阿仏尼が為家に出会った年とされる。

次に、文化圏からの影響が考えられる和歌について分析したい。

一六むすぶ手ににござる心をすすぎなばうき世の夢やさ



## めが井の水

「さめがい」は、つらい現世の悩みから「覚める」と地名の「さめがい」の意が掛けられている。そこに水の縁語として、「むすぶ」「にごる」「すすぐ」「うく」などを使っている。

「さめがい」を使う用例は、中世期に集中している。鎌倉幕府ができ、急速に東海道が発達したため、「さめがい」が和歌に詠まれるようになってきたという時代背景が影響として考えられる。その中でも、『十六夜日記』以前の用例は二例しか見られず、和歌に、「さめがい」を詠み込むことは、当時ではめずらしいと考えられる。先行歌には、以下が挙げられる。

わくらばに行きてもみしかさめがみのふるきし水にや

どる月影 (金槐和歌集・二七八・源実朝)

おもひゆくそのおもかげに袖ぬれてむすばぬ夢もさめ

がみの水 (明日香井和歌集・一四九九・藤原雅経)

源実朝は、定家に和歌を習っていた。<sup>(注22)</sup>また、飛鳥井家の祖である藤原雅経は、源頼家に厚遇され鎌倉幕府政所別当大江広元の女婿であり、<sup>(注23)</sup>鎌倉歌壇との関わりも深い。雅経の孫雅有は、のちに『飛鳥井雅有日記』で、為家や阿仏尼との交流を描き、その親しい間柄を示している。<sup>(注24)</sup>

三三まちけりなむかしもこえしみや路山おなじしぐれのめぐりあふ世を

「しぐれ」は「めぐり」の縁語である。阿仏尼は以前「うたたね」を記しており、その際にも、養父に勧められて浜松まで旅をしている。そのため、宮路山は二回目の訪問となる。その経験をもとに、この和歌を詠んだと考えられる。阿仏尼は、東海道を下る旅を二回も経験している。かつ『十六夜日記』は阿仏尼の晩年作でもあるので、それまでに得た様々な経験や知識を用いて、書きあげられたものだと考えられる。先行歌には以下が挙げられる。

なにしおはばとほからねどもみやぢやまこれにたむけ

のぬさにせよきみ (躬恒集・一五〇・凡河内躬恒)

あらしこそふきこざりけれみやぢ山まだもみぢばの

ちらでのこれる (更級日記・三・菅原孝標女)

君があたり雲井にみつつみやぢ山打ち越えゆかん末も

しられず (五代集歌枕・三八九・詠人不知)

こえゆかむすゑはいづこそみやぢ山かすむ雲井の春の

夕ぐれ (柳葉和歌集・四五二・宗尊親王)

凡河内躬恒は、宮路山と都を想起させる「宮」を掛けている。『更級日記』では、実景が詠まれている。『五代集歌枕』にも詠まれていることから、「宮路山」は当時よく知られていた可能性は高い。しかし、先行歌は少ないため、実際に和歌に詠まれることは少なかったと考えられる。宗尊親王は、為

家に和歌を学んでいたこと(注2)から、その影響関係が考えられる。

五七あはれとやみしまの神の宮柱ただここにしもめぐりきにけり

みしまの神の「みしま」は、地名の「三島」と「見す」が掛詞になっている。また、第二句の最初の文字「みしま」の「み」と、三句最初の「宮柱」の「み」が韻を踏んでいる。さらに「めぐり」は柱の縁語となっている。

あだなみのたつやおそきとさわぐなりみしまのかみは  
いかがこたへむ (実方集・八一・藤原実方)

また、「三島」と「神」を使った先行歌には、次の和歌が挙げられる。

思ひ出づるところや神もかよふらん夢にみしまのみたらしの水 (竹風和歌抄・二七一・宗尊親王)

「三島」を「見す」と掛詞にしている点で、宮路山の例と同様に文化圏の中での関係性が考えられる。阿仏尼は『十六夜日記』で神社に奉納している和歌が多い。旅の目的が勝訴であることから、神社への祈願は必要なことであったと考えられる。

五九たづねきてわがこえかか箱根路を山のかひあるしるべとぞ思ふ

第四句の「山のかひある」の「峡」が掛詞になっている。

「箱根」や「箱根の山」は用例が多く見られるが、「箱根路」の用例は少ない。箱根路を『十六夜日記』以前に和歌に詠んでいる例は以下の二首となる。

はこねぢをわがこえくれば伊豆の海やおきのこじまに浪のよるみゆ (金槐和歌抄・五九三・源実朝)  
はこねぢをこえつつみればうき島のひとむらかすむ松のむらだち

(前長門守時朝入京田舎打聞集・二六〇・時朝)  
時朝は信生の次男であり、宇都宮歌壇の人物である。信生の兄蓮生の娘は、為家の先の妻でもあることから、御子左家との関わりは深い。「はこねぢ」や「こゆ」など、使っている言葉にも共通点が見られる。いずれの和歌も箱根路を越えた際に見える情景を詠っているが、それぞれの心境は異なっている。阿仏尼の和歌は山の「かひ」と旅の「効」を掛詞とし、神の加護を祈念している。

田渕句美子氏は、阿仏尼の子為相の鎌倉下向について父没後の昇進は停滞し、細川庄は訴訟中で経済的にも苦しく、都で歌道家として立つにはまだ弱体すぎた。為相は、和歌など文化の吸収に熱心な関東での立身を志し、母阿仏の没後、遅くとも正応期(一二八八〜一二九三)には関東に下った。直接的には訴訟が目的であったかも

しれないが、関東の人々に和歌の指導を行い、為家から相伝した歌書類を関東の人々に見せ、書写させ、関東で文化指導者となるための基盤を築いた。母阿仏が鎌倉滞在中に培ったであろうネットワークが、大きく益したことは、疑いない。

と述べている。<sup>(注26)</sup>

『十六夜日記』の和歌で、今まであまり分析されてこなかった当時歌枕とされていなかったと考えられる地名詠には、和歌の技巧だけでなく、為家を師とする和歌の思想をはじめとして、継承されるべきその文化圏の在り方が込められていると言えるのではないだろうか。

#### 四、 おわりに

以上、『十六夜日記』の和歌の中から、当時和歌の世界で馴染が薄いと考えられる地名詠について総合的に分析をおこなった。その結果、阿仏尼がこれまで歌枕として知られていた地名のみならず、和歌の世界で馴染みが薄いと考えられる地名でも実景やその時々的心境を踏まえながら、和歌を詠んでいることがわかった。その時々々の気象状況、人々の動き、法華経との関係、掛詞を利用した地名表現、源氏物語を本歌

とした詠み、東海道の様子などの要素が、それぞれの和歌には盛り込まれている。

また、先行歌との影響関係からは、為家歌との関連性が見られた。阿仏尼にとって、為家は無くてはならない存在であり、その影響ははかりしれない。歌枕詠ではなく注目されることが少なかったと考えられる地名詠にも、為家の影響がうかがえることから、阿仏尼の為家に対する考えや思いが十分に見てとれるだろう。さらに、鎌倉・宇都宮といった東国歌壇との影響関係も注目される。和歌の世界の伝統を重視するだけでなく、自身の文化圏に関わる要素を盛り込んでいくことで、阿仏尼独自の世界を打ち出そうとしていたと考えられる。

阿仏尼は、『夜の鶴』の最後の章で、即詠の面白さについて、又、取りあへぬ事に、時もかはらず詠み出づる歌の返し、

立ちながら言ひ出す歌は、さしあたりて、たゞ今言ひた

き事を様よく続け候ひぬれば、何の風情にも過ぎて候。

と、述べている。<sup>(注27)</sup>『夜の鶴』はその特性から為家に学んだことを、和歌の伝統的なきまりを中心に丁寧にわかりやすく述べている。しかし、この最後の章に関しては、為家の歌論にはない内容であり、阿仏尼独自の和歌観であることに注目される。<sup>(注28)</sup>この場合は、返歌について述べられているが、贈答歌だ

けでなく、歌道の熟練した技能を使い伝統を重んじながらも、その場で感じたことを生かして機敏な詠みをおこなうことを、阿仏尼が好んでいることがわかる一説ではないだろうか。

元来『十六夜日記』は、子である為相や為守、冷泉家周辺の者に向けて送られた作品とされ、その和歌には、<sup>(注29)</sup> 伝統や様々な技巧が使われていることが指摘されている。しかし、それだけではなく、為家や阿仏尼を取り巻く文化圏も看取される。

為相は阿仏尼没後、関東で活躍することになる。それは、阿仏尼が『十六夜日記』で伝えたかった御子左家から続く冷泉家としての文化活動の継承を、為相が理解し受け取った結果なのではないだろうか。

## 注

- (1) 『十六夜日記』の本文研究については、三角洋一「訴訟の旅へ―十六夜日記」(特集…人はなぜ旅に出るのか―古代・中世文学に見る)―中世文学に見る旅 『国文学』 七一巻三号 二〇〇六年 一一九頁に基づく。
- また、近年の諸本研究については、岩佐美代子「九条家本十六夜日記(阿仏尼)について」 鶴見大学紀要 29 一九九二年・久保貴子『十六夜日記』考 ―『残月抄』における一考察』 『日記文学研究』第一集 新典社一九九三年が肯首される。
- (2) 風巻景次郎「阿仏尼の文学(特に十六夜日記に於いて)」『国語と国文学』六巻一〇号 一九二九年 二五〇頁
- (3) (2) 二五〇頁〜二五一頁
- (4) 川嶋郁子『十六夜日記』の中の阿仏の和歌―掛詞を中心に― 『中世近世文学研究』十二号 一九七九年 八三頁
- (5) 高橋ほつ枝 『『とはずがたり』と『十六夜日記』―鎌倉旅行をめぐって―』 『文芸と批評』三巻八号 一九七二年 三三頁
- (6) 長崎健「特集・古典文学と旅 阿仏尼―子を思う旅― 『国文学 解釈と鑑賞』六七巻二号 二〇〇二年 八一頁
- (7) (2) 一九三〇頁
- (8) 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典 増訂版』 笠間書院 二〇一三年 二六頁
- (9) 岩佐美代子校註・訳 「十六夜日記」 新編日本古典文学全集48 『中世日記紀行集』 小学館 一九九四年 二七五頁頭注

- (10) 吉原栄徳『和歌の歌枕・地名大辞典』 おうふう  
二〇〇八年 四八五頁
- (11) 築瀬一雄『校註 阿佛尼全集 増補版』 風間書房 一九八一年 一八七〜一八八頁
- (12) 安井重雄 「紀行と和歌―地名を詠むということ―」 『中世詩歌の本質と連関』(中世文学と隣接諸学6) 二〇一二年 一五九頁
- (13) 築瀬一雄・武井和人『十六夜日記・夜の鶴注釈』 和泉書院 一九八六年 一五八頁
- (14) (8) 三一頁
- (15) 新城常三『鎌倉時代の交通』 吉川弘文館 一九九五年 二二二頁
- (16) 『日本地名大辞典』22静岡県 編者竹内理三 川書店 一九八二年 六七頁
- (17) 岩佐美代子氏は、『十六夜日記』はなぜ書かれたのか 中世日記の謎『国文学 解釈と教材の研究』三八巻二号 一九九三年 七五頁において、『十六夜日記』がなぜ書かれたのかを分析していく中で、亡夫藤原為家の意志の存在の大きさを主張し、その影響関係について述べられている。
- (18) この和歌に使われている「やすの川霧」という言葉については諸本間に異同がある。この件に関しては稿を改めたい。(異文・・・野洲川の霧)
- (19) 久保田淳・馬場あき子・村尾誠一・山田洋嗣・渡部泰明『歌ことば歌枕大辞典』角川書店 一九九九年 九〇五頁、(8) 四二八頁、(10) 一七四五頁
- (20) 佐藤恒夫 『藤原為家全歌集』 風間書房 二〇〇二年 三九一頁・三九二頁
- (21) 佐藤恒夫 『藤原為家研究』 笠間書院 二〇〇八年 一一四〜一一五頁、田淵句美子 『阿仏尼』吉川弘文館 二〇〇九年 六四頁に指摘がある。
- (22) (21) 三一頁
- (23) 秋庭隆『日本大百科全書』20 小学館 一九九五年 三〇七頁
- (24) 水川喜夫 『飛鳥井雅有日記全釈』 風間書房 一九八五年 六一頁
- (25) 「嗟峨のかよひ」に、「源氏始めんとて、講師にとて、女主人を呼ばる。簾の内にて読まる。実に面白し。世の常の人の読むには似ず。慣らひあべかめり。」とある。
- (18) 樋口芳麻呂校註「文応三百首」 新日本古典文学大系46 『中世和歌集 鎌倉篇』 岩波書店 一

九九一年 二六五頁 「墨点同詞書 民部卿入道為家卿」という記述がある。

(26) 田渕句美子 『阿仏尼』 吉川弘文館 二〇〇九年 二二一頁

(27) (7) 一〇四〜一〇五頁  
(28) 以下の論文で、指摘がある。

田辺麻友美 「藤原為家と阿仏尼との和歌の贈答に関する一考察」 『国文白百合』三〇巻 一九九九年 二四頁、田渕句美子『阿仏尼』 吉川弘文館 二〇〇九年 一〇六頁

(29) (9) 二九九頁 「二 東日記」本文に「下りし程の日次の日記を、この人々のもとへつかはしたりし」という記述がある。

#### 付記

本稿は、第五十五回古典研究会（於福岡大学、二〇一八年十二月）にて口頭発表したものに修正・加筆したものである。席上、また成稿の過程で貴重な御教示を賜った諸先生方に深甚の謝意を表します。

（ふかみ さとし・長崎大学）

（さかい のぶこ・長崎大学大学院水産・環境科学

総合研究科博士後期課程・院生）